

小関先生のこと

第三回(昭和二十九年)卒業生 松岡 甫明

小関清明先生がお亡くなりになられた。このことは高紙紙上にて拝見した。毎年いただいていた年賀状の番地に記憶があった。お年八十七歳。またお一人かけがえのない恩師を失ってしまった。

先生に最後にお目にかかったのは、平成元年先生が叙勲の榮に浴されその祝賀会が城西館で催された時、ご挨拶を申し上げると「よく来てくれたね。憶えているよ」と微笑をたたえながら親しくお声をかけていただいた。

先生にはじめてお目にかかったのは昭和二六年高知大の文理学部文学科に入学にはじまる。

二年次になろうとした三月次年度の入学試験があり、この時友人の広瀬典民氏が模範解答集を出す計画を立て、私が国語を受けもつ羽目になった。難解な所もあつて困惑していた所を小関先生によつて助けていただき事なきを得た思い出がある。

二年次後半になつて私は国文科に進むことを決心した。ここで石津先生、松村先生をはじめ諸先生方のお導きを受けることになった。専門分野の履修もはじまつた中に、古代文学の「記紀歌謡」を中心とした小関先生の講義を受けた。講義は懇切丁寧を極め、かつ実証的であつた。何よりも何時も微笑をもつて学生に対しお導きいただいたことは、後年自分が生徒を指導する立場になつた時、どれほどか教えられたことか計りしれないものがあった。

ご承知のように先生は若くして「万葉集古義」の著者である鹿持雅澄に注目し全力を傾けてこれが研究に取り組むことになられた。

平成四年三月上梓をみた「鹿持雅澄研究」のあとがきに先生はこう述べている。

「つたない小著ながら、この書の成るまでには長年にわたり多くの方々のご恩を蒙っている。雅澄翁のご子孫の方々と佐々木信綱博士が貴重な関係資料の閲覧を心よく許して下さいましたことは中でもこの上ない幸であったし、恩師先輩の方々からもいろいろ援助をいただいた。このことなくしては本著はあり得なかつたしだいである。これらの方々に対し衷心よりお礼を申し上げ、また故人となられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。」と。ことに佐々木博士の許に行かれた時、もう一人の恩師久松潜一博士の紹介状があつたというお話にはそれぞれの先生のお人柄がしのばれ敬慕の念ひとしおである。

今となつては全てが遠い日々の出来ごととしてしか浮んでこないが、過ぎし日貧しくはあつたが、よき環境の中よき師に恵まれ小津原頭に青春の日をもてたことに心からお礼を申し上げます。

先生のご冥福をお祈り申し上げるしだいである。

小関清明先生のこと

元教育学部教授 篠原 義彦

小春日和の昼下がり、人文学部の鈴木先生から電話があつて、次号の「高知大國文」に小関先生の追悼文を載せたいので宜しくとのことであつた。私以外の執筆者は、渡邊輝道先生、それに大先輩の松岡甫明氏。当方は補導学生でもなければ、先生のもとで卒論をものしたわけでもないので、本来は他の諸兄弟の名を挙げて固持すべ